

幸福工房

祖母は十年以上の寝たきり生活をしてきました。体が自由に動かないために、床ずれができ、介助してもらっても衣服がほとんど着られないのです。その点、和服は脱ぎ着がしやすいのですが、帯をしめることができません。

「私に似合う服はないかのう。」

と、祖母から聞かれても、当時は衣服に体を合わせることも普通の世の中。その服を見つけないことは簡単ではありません。

私の家は今でこそ阿賀にある小さな工房ですが、江戸時代から三百年続く呉服屋です。太平洋戦争後は婦人服、紳士服、子供服まで衣服に関するものを扱ってきました。その長い伝統も何の役にも立たず、私は祖母の気に入る衣服をさがせないまま、大切な人を失ってしまいました。

祖母が亡くなってからしばらくして今度は祖父が床につきました。だんだん祖父がベッドでおもらしをするようになったので家族がおむつをつけようとすると、祖父はそのおむつを投げ飛ばします。大正時代を軍人として生きた誇り高き祖父には、私が見てもおむつは様になりません。毎日、おむつを投げる祖父にどんな衣服なら解決できるのか、また私に難題がのしかかります。しかし、祖父のおむつとの格闘も長くありません。老衰しておむつを飛ばす気力がなくなり、装着されるままなのです。

「ああ、こうして一生が終わる。」

そんな祖父の姿は見ていられませんでした。こういう時に役に立てない自分自身にも腹が立って仕方ありません。服と縁のある家に生まれながら、結局、祖母にも祖父にも衣服作りの恩返しができないのです。

「人様に三百年も衣服を商ってきたその身内が、こんなことでどうするんだ。」
と、私はあせっていました。

「よし、それなら私が快適な服を作ろう。」

これがきっかけとなり、衣服に困っている人のための衣服作りを決心したのです。そして、屋号を小川衣料店から「ハッピーおがわ」としました。みんなが幸福にハッピーになれるようにと願いをこめました。しかもハッピーな衣服を作るのですから、「幸福」と名づけ、ミシン一台の縫製コーナーを「幸福工房」としたのです。丁度その時、幸いなことにスタッフとして、赤ちゃん衣服のデザイナーも加わりました。赤ちゃんは全介助のデザイナーなので、このアイデアをいろんなところに生かすことができるのです。仕事は順調に進んでいました。

ところが私はその後、健康診断で末期の直腸がんであることが分かったのです。
「うーむ、ここで死ぬわけにはいかんのだが。」

私は、身障者、高齢者のみなさんに要望された衣服の課題が山積みなのです。この時ばかりは、生と死について真剣に考えたのです。

入院した病室はともながめの良い部屋で、窓の外には大きな桜の木が見えます。三月初旬、桜といってもまだ固いつぼみです。

「よし、この桜が咲くまで生きよう。」



がんの手術は予想外に長時間になり、がん部の摘出量が多く、しかも体が動かないのですから、おむつをすることにになりました。当然防水シートも敷いてあります。手術後の痛み以上にその防水シートとおむつの不快感はなんとも言えないものです。それに加えて看護師さんが、病室を定刻に巡回しておむつを開けて排泄のチェックをします。

最初は感覚がないので仕方がないと我慢していたのですが、感覚が戻った頃にはおむつを投げたい気持ちにもなります。そういった気持ちになる時、祖父とおむつの思い出がよみがえるのです。

「祖父もつらかっただろうな。」

この時ばかりは祖父の気持ち痛みほど分かります。そんなことを考えていたら、ふと、祖父がよく私に口癖のように言っていた「できるときにやれ。」という言葉思い出したものです。がんという病気になる弱気になっていた私なのですが、祖父の言葉に背中を押された気がして、

「いつか快適なマットレスを作ってやろう。」
と、私の心に火がついたのです。

退院後も毎日の睡眠はとても苦痛です。お尻の傷跡が痛み、座る、寝るがうまくできないのです。痛みから寝返りすることもできず、体がしびれ大変つらい毎日、寝返りがうてないことがこれほど辛いということを、私はこの時初めて知りました。

そんな折、以前お世話になっていた研究所から不思議なモノが届きました。それは白いへちマ状のマット大の素材で、生まれて初めて見る高反発クッションです。早速、私自身がそのクッションを試してみました。なんと、それは寝返りのしにくい苦しい睡眠を解消してくれたのです。軽くて通気性がよく、洗えるというそのクッションは私をとりこにしました。私は、その新素材のクッションを活用し座布団を作って販売したのです。するとその後、元の特別養護老人ホームから依頼があり、さらに大座布団を作ることもなったのです。しばらくして介護長さんから、

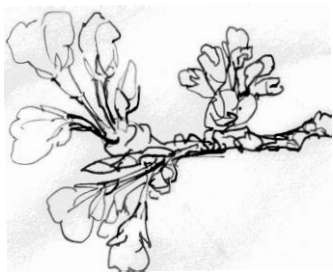
「おばあちゃんの床ずれが治ったんです。」

という驚きの報告を受けました。この製品はロコミでも広がり、呉市内の病院からの依頼も多くなりました。

思い起こせば、私が介護用品を取り扱うきっかけは、祖父母の悲しい経験からだったように思います。それは失敗の連続でした。それでも製品の開発を進めていく原動力となったのは、介護士さん、看護師さん、患者さんや先生方、仕事を共にしたスタッフ、多くの方々の支えがあったからのように思います。私の仕事はこれで終わりではありません。これからも身障者や高齢者の方々が喜んでもらえるような人に優しい衣服づくりを生涯の仕事として続けていきたいと思っています。

(注)床ずれ

圧迫により皮ふに血液が十分に流れにくくなり、その部分が損傷を受けた状態のこと。



小川さんが病室で描いた絵